
ちよいワル社史編纂室

安藤 祐介



幻冬舎文庫

ちよいワル社史編纂室

目次

第一章	今日から不良中年	7
第二章	漂流家族	39
第三章	プロジェクト・アフター5	77
第四章	いまさらパパ、いまさらママ	103
第五章	閑職マジシャン、路上デビュー	147
第六章	投げ銭ボーナス七百八十円	165

第七章 アフター5 魔術団

207

第八章 雪のちみぞれ雨

243

第九章 眠れぬ夜を越えて

279

第十章 トランプの誓い

319

第十一章 マジックは魔法にあらず

355

エピローグ

390

解説 松原浩

420

第一章 今日から不良中年

「こつちから願ひ下げだ、このブタ野郎」

たまき としはる ひらた
 玉木敏晴は平田営業企画部長の胸倉をつかみ、凄まじんだ。

午前八時四十五分、朝陽が射し込む十五階の喫煙室。始業前の一服で談笑していた社員たちの視線が、一斉に集まる。

喫煙室は一瞬にして静まり返った。

「おい、離せ！」

ほおにく
 頬肉に埋まった細い目を見開き、平田は叫んだ。

「もう、あんたに命令される筋合いはねえぞ。そうだろ？」

敏晴は怒りにまかせてワイシャツの襟元をねじり上げた。

昨日まで上司だった男の胸倉をつかんでブタ野郎呼ばわり。いい気分だと高笑いしてやりたいところだが、敏晴の目は涙目になっている。

襟元をねじり上げていた右手をゆるめ、平田を突き放した。

「玉木、もうおしまいだぞ！ こんなことをして、タダで済むと思うなよ！」
 自らの威厳を保つためか、平田は乱れた襟元を正しながら大声で恫喝どっかつした。

「冗談じゃない。じゃあ、今の俺はタダで済まされてるとでも？」

悲しいかな、もはや失うものなどない。ある意味「無敵」の人間だ。

今日十月一日付の臨時異動で、組織図にも載っていない部署へ送り込まれる。

敏晴は見えて見ぬふりをする社員たちの間をゆつくりと通り過ぎ、喫煙室を後にする。誰一人として敏晴に声を掛けようとはしない。

エレベーターホールに出て、下層階行きのボタンを押した。

へ一生懸命やっつてる奴のことは、誰かが見てくれているものだ

新入社員時代の上司が贈ってくれた言葉が虚しさと共に思い出される。

玉木敏晴は四十五歳でグレた。

勤続二十二年の善良なる会社員がある日突然グレてしまうには、それ相応の事情がある。

出勤する社員たちを乗せ、エレベーターが十五階に上がってきた。

ドアが開き、営業企画部の元部下たちが降りてくる。すれ違いざま、何人かが敏晴に一応「おはようございます」と声を掛け、逃げるように部のフロアへと駆け込んでいった。

新しい職場は地下二階だ。乗り込んで、地下二階のボタンを押す。

ゆつくりとエレベーターが動き出し、ガラス張りの向こう、見下ろすビルや道路がだんだ

ん間近に迫ってくる。

もう戻れない。そう直感した。

敏晴の右手には、平田の胸倉をつかんだ時の感触がまだ残っている。

煮えたぎった血を冷ますように、ゆっくり深呼吸してみる。

最初はただひと言、物申して立ち去るつもりだった。喫煙室に入ってきた平田を見つけ、まずは正々堂々、正面から声を掛けた。

「平田部長、長い間、大変お世話になりました」

なにかひと言、ビシツと言って、やり場のない気持ちにケリをつけよう、それだけでいい。自分に言い聞かせて次に継ぐ言葉を探した。ところが、平田が啞え煙草タバコで発したひと言によって事情が変わった。

「すまんね。まあ、ほとぼりが冷めたら、戻れるように口利いてやるから。それまで二、三年の辛抱だ」

突き上げる衝動を抑えきれず、平田の胸倉をつかみ上げていた。

へこつちから願ひ下げだ、このブタ野郎

こうなつたら、とことんグレてやろう。

「チカ、ニカイ、デス」

無機質なアナウンスとともにエレベーターのドアが開き、薄暗い廊下へ出る。心なしかひんやりと肌寒く、埃ほこりくさい。長い廊下には人気ひとけもなく、左側の壁に沿ってスチール製の書架が並んでいる。

通路の右手には非常用食糧の備蓄倉庫、資材の保管庫、機械室。日常業務とは縁遠い部屋が連なっている。

まっすぐに続く廊下を三十メートルほど歩くと、行き止まりに突き当たった。もう一度、通路の右手を確認する。新しい職場はそこにあつた。

〈総務局社史編纂室〉

敏晴は部署名が書かれたプレートを確認し、ドアノブに手をかけた。

不良中年社員らしく乱暴にドアを引く。

「すいませくん、営業企画部から来た玉木ですけど」

戸口に立ち、かたたるような声で名乗りつつ下目遣いに室内を一瞥いちべつする。点滅する蛍光灯の下、六つのデスクからなる島に男が三人、女が一人。

強烈な違和感に囚われ、足がすくんだ。

違和感その一。複合機、書棚など、オフィスにあるはずのものが見当たらない。

違和感その二。デスクの上は視界良好。電話もパソコンもない。

違和感その三。上席者らしき小柄な初老の男が自席の横に立ち、実に穏やかな笑みをたたえながらけん玉に興じている。しかも、けん先と大皿の縁との狭間や、けんのグリップ部分など、信じられないような所に次々と玉を載せてゆく。達人芸だ。

その他、違和感その四からその十いくつかまでが敏晴を飲み込むように一気に押し寄せてきたが、とにかくまずは挨拶をと思ひ、気を取り直す。

「あの……ごめんください」

ドアを開ける前の勢いはどこへやら。商店の戸口から主を呼ぶような調子でもう一度声を掛けた。すると、初老の男がけん玉を操る手を止め、ようやくこちらを向いた。

「ああ、玉木さんですか。はじめまして、室長の大和田です。その空いている席にお掛けになって、まあ、ゆっくりやってください」

敏晴はとりあえず「よろしくお願ひします」と応じて戸口に一番近い席に座り、デスクの上にはバッグを置いた。

敏晴の真向かいに座っている若い女性が顔を上げた。目が合つてドキリとした。色白で切れ長一重まぶたの和風美人。後ろにキュッと束ねた長い黒髪は、薙刀の稽古に臨む武家の息女を連想させる。

黒髪美人の隣に座る男は、やたら恐縮した様子で敏晴に向かって「すみません、恐れ入り

ます、すいません」と、小刻みに何度も頭を下げる。その様子があまりに卑屈ひくつで、かわいそうになる。敏晴はつい「どうも、よろしくお願いします」と笑顔で応じた。

そこでふと気付く。自分は今日からグレたのではなかったか。相手のペースに巻き込まれてどうする。

もう一度、不良中年社員らしく「室長さーん」とぞんざいな調子で呼びかけた。

「ゆっくりやってくださいって言われてもねえ、社史編纂？ どういう仕事ですか。一応きちんと言明してくださいよ」

大和田は意にも介さず飄々ひょうひょうと答える。

「仕事ですか。実は、なにもないんです。はははは」

「ははは……」

敏晴はつまらない冗談に付き合ったつもりで笑ったが、ふと不安になる。

目の前には電話もパソコンもない、見晴らし良好のデスク。

急に怖くなり、敏晴は上着の内ポケットから携帯電話を取り出した。ディスプレイを確認する。案の定、画面の左上に「圏外」と表示されている。

九時のチャイムが鳴り、大和田はけん玉を机の引き出しにしまった。

「さあ、皆さん、ゆっくりやりましょう」

大和田の声に合わせ、三人の社員たちはおもむろに何かの作業を始めた。

敏晴の右隣に座る長身の男は、デスクの足元にあつた段ボール箱から使用済みのコピー用紙らしきA4サイズの紙の束を取り出し、印刷済みの面にひたすら「裏面再利用」というゴム印を押している。

長身男の正面に座る挙動不審のメガネ男は、鬼気迫る形相で段ボール箱からフラットファイルを取り出して机上に積み上げる。目にも止まらぬ速さと思いきや、よく見ると手がせわしなく動くばかりであり作業は進んでおらず、すこぶる要領が悪い。

末席に座っている和風美女は、廃棄文書の束から一枚ずつ取り出しては目を走らせている。何をチェックしているのか分からないが、射るような目つきだ。確認を終えるとその紙を別の段ボール箱へ投げ込む。

「あの、皆さんは、何をしているんですか」

敏晴は大和田に尋ねた。

「ああ、ご紹介しましょう。こちらは室長代理の小出さん。今コピーの裏紙を作ってくれています。その向かいが柏さん。廃棄文書の仕分けをしてくれています。そしてこちら、紅一点の若宮さん。彼女は、ちよつとした特殊任務にあたっています」

大和田は室長席に座ったまま、手短過ぎる説明を終えた。

「まあ、その席に座って、まずはゆっくり見学しててくださいよ」

大和田に促され、仕方なく席に座った。見れば見るほど目を疑いたくなるような光景。いたいこの中で自分は何の仕事をするというのか。

「あの、小出さん、ちょっとうかがっても……」

よろしいでしょうか、と言いかけたところで小出がものすごい剣幕で怒鳴った。

「知らねえ！」

「いや、まだ何も訊きいていませんが……」

「知らねえ、知らねえ！」

首を左右に激しく振りながら、小出は叫び続ける。

すると、斜向かいの席で若宮がすつくと立ち上がった。線の細い長身。グレーのパンツス
ーツがよく映える。敏晴は思わず見上げてしまった。

「静かにしてください！」

若宮の一喝いっかつ。小出はビクリと肩を震わせ、若宮を見上げた。少し睨にらみ合った後、小出がす
ごすごと視線を落とした。

若宮はそれを見届けると、今度は敏晴を一喝。

「玉木さん、小出さんに質問するのは止めていただけますか！」

敏晴はどういうことか分からず「はい？」と素つ頓狂な声を発する。室長席の大和田が立ち上がった。

「ああ、玉木さん、小出さんへの質問はご法度なんです」

「なんなんですか、そのルールは」

敏晴は泣きそうな声で尋ねた。全く意味が理解できない。

小出は「知らねえ、知らねえ」と念仏のように繰り返しながら、また使用済みのA4用紙に「裏面再利用」のゴム印を押し始めた。

それからしばらくの間、敏晴はただ呆然と室員たちの作業を眺めていた。すると大和田が突然「来た！」と叫んだ。

「降りてきましたよ！」

大和田はA4の紙を室員たちに掲げてみせた。紙には几帳面な字で、こう書かれていた。

「残業は しない させない したくない」

「なんですか、それ……」

「ノー残業デー向けの標語です。どうです、玉木さん。素晴らしいのができてしまいましたねえ」

「はあ……」

「啞然あぜんとしたまま、敏晴は生返事をした。

「でも、ひらめくのが少し早過ぎたのが玉に瑕きずでしたな。仕事はゆっくり、じっくり、なるべく時間を使いながら進めましょう」

大和田がなにやら反省めいたことを言っているが、相変わらず意味が分からない。

「傑作ができてしまったところで、少し早いですが、おやつにしましょうか」

敏晴は時計を見た。まだ九時十五分だ。

「うちの家内がね、美味おいしい梅干を漬けたんですよ。さあ、どうぞ」

大和田は鞆から梅干の入った小瓶を取り出し、ふたを開けて皆に勧めて回ろうとする。敏晴はその様子を見ていよいよ我慢ならなくなった。

「あなたたち、給料泥棒ですよ！ 私に給料泥棒をやれと言うわけですか！」

思わず口を衝ついた優等生的な言葉に愕然がくぜんとした。所詮しよせん自分は従順な組織人なのか。

少しの静寂の後、小出が「知らねえ、知らねえ」と呟つぶやきながら再びゴム印を押し始めた。

「玉木さん、煙草は吸われますか」

大和田が胸ポケットからハイライトの青いケースを取り出しながら言った。

「はい、吸います……」

「それはよかった。ここにいと、時々煙草でも吸わなければ間が持ちませんからねえ。ち

よつと、一服しに行きませんか」

敏晴はうなづく。大和田は梅干の入った小瓶を島の中央に置いて言った。

「これ、美味しいですよ。どうぞ皆さん食べてください」

廊下へ出て、社史編纂室の二つ隣の『B2会議室』という部屋に案内された。

「こちらが私たちの喫煙室です」

中に入ると強烈なニコチンの臭気が鼻を衝いた。換気扇が回っているのかわからないほど、壁も天井も黄色く汚れている。壁際には壊れたスチール棚やロッカーが置かれ、部屋の中央にスタンド式の灰皿がぼつんと置かれていた。

敏晴は胸ポケットから煙草を一本取り出して啜え、ライターで火を点けた。大和田も同時に火を点ける。

訊きたいことがあり過ぎて言葉にできない。すると大和田が先に口を開いた。

「玉木さんは、何をやっただんですか？」

さりげない口調だった。異動してきた社員に対するお決まりの質問なのだろう。まるで新入りの囚人になった気分だ。

改めて問われ、ますます分からなくなる。自分が何をしたというのだろう。

「信じてしまっただけです」

奇妙な回答だが、ひと言で表せばこれに尽きる。話し始めた先から感情が込み上げる。「信じた自分が、バカでした」

そうだ。まんまと乗せられたのがいけなかった。

そもそも営業企画部長の平田とは、最初からウマが合わなかった。すがすがしいまでに出世と保身の亡者^{もうじや}。仕事は出世するための手段、イエスマンの取り巻きで周りを固めて気分よく出世したい。そういうタイプの人間だった。

敏晴は平田の性格を知りながら、たびたび意見した。会社のため、仕事のためならば上司と論を戦わせることも厭^{いと}わなかった。そのため、平田からは露骨に冷遇された。

しかしある時、平田から呼び出された敏晴は、重大かつ勝算の乏しいプロジェクトの現場指揮を引き受けることとなった。

へ玉木、頼れるのはお前しかない

平田の安い口説き文句を真に受け、粹に感じた。

今思えば、頼りにされると断れない性格を逆手^{さかて}に取られたのだ。

テレビ市場への生き残りをかけた一大プロジェクトだった。

往年はその市場規模から「家電の関ヶ原」ともいわれていたテレビ。国内家電メーカーにとってまさにドル箱だった。しかし薄型液晶テレビが主流となった近年、価格競争に突入。

韓国の製品に押され、各社とも減収減益の一途を辿った。

東洋電工も例外ではなかった。

画質にこだわり、高品質な製品を開発しても、ユーザーは低価格な韓国製品へ流れてしまう。国内の競合他社は画質勝負からかじを切った。インターネット機能の充実や、オフィスでの需要を見込んだ開発を進め、差別化を図った。画質勝負にこだわり続けた東洋電工は、完全に市場の変化から取り残されていった。

社長は経営判断のミスを棚に上げ、役員連中を叱り飛ばした。震え上がった営業局長からほどなく命令が下った。新機能をPRし、戦略的な宣伝活動を展開せよと。

プロジェクトリーダーを決めるにあたり、営業企画部宣伝企画チームの課長、玉木敏晴に白羽の矢が立った。「この困難に立ち向かうことができるのは玉木君をおいてほかなし」という平田の推薦だった。

こんな大プロジェクトを課長クラスの人間が率いるのは異例のこと。ところが、実際は誰も引き受け手がおらず、下のほうまでお鉢が回ってきたのだ。

そして敏晴はそういう仕事にこそロマンを見出してしまおうような、時代遅れで、損な性格の男だった。

最初から、勝ち目の薄い戦いだだった。